
陰咲君はお供

村人S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰咲君はお供

【Zコード】

Z0743BA

【作者名】

村人S

【あらすじ】

あらすじ？ そうだなんか冷めてる主人公が勇者のお供として頑張つて行くかもしれないよ「え？かも？がんばってくれよ空」「気が向いたらな

こんな話

残酷な描写は一応入れただけ

他に似てる小説などがあつても、これは自分で考えています。

なんか呼ばれた（前書き）

これは私が初めて書いた小説です。
面白くなかったら途中で見るのをやめて構いません
が、できれば見てください

なんか呼ばれた

とつあえず自己紹介をしよう。俺の名前は陰咲空だ。容姿、頭脳ともに普通の男。

そんな俺には何でもできる幼馴染がいる。

その幼馴染の名前は冬介皐月という。この男はさつきも言つた通り何でもできる勉強スポーツ何でもこなされた。しかも顔もいいからモテまくる。俺はこいつが嫌いだ。静かなところに居たいのに騒がしいところに連れてかかるし面倒事にも巻き込まれたことがある。そんな皐月がいきなり休日に今日遊ぼうと言つてきた。出来れば断りたいが親が皐月を気に入つてるので断ると家を追い出される。え？普通こんなんじや追い出されない？前遊ぶのを断つたら追い出されたんだ追い出されるのはもうわかつてる。

で、遊ぶのがアイツの家だ。しょうがなく行くと皐月は何する？と言つ出した。

遊ぶことを決めてから呼べよ。でもそつ思つてこじりこじりと長年頑張つてやつと今年やることができるようになつたポーカーフェイスで隠し、ゲームでもやるうぜと言つた。

遊ぶことが決まりまあ遊ぼうと思つた瞬間俺と皐月は白いものに包まれた。

そして、まぶしさが消えたので目を開けてみると人がいっぱいいた。数えてみると27人だ。

次に皐月を探してみると足元でまだ寝ていた。

取りあえず皐月を蹴つて起こし、話をする。蹴つたとき何人かがなんか言つてたが無視だ

「おい皐月起きたか？」

「ああ起きたが蹴つて起こすなつて前から言つたじゃないか」

「そんなこと言つてたか？まあいいこれはなんだ？」

「これ？ってなんだここ…？」

今きずいたようだ使えんと思つていると一人が話してきた

「あの、どっちが勇者様ですか？」

何言つてるんだ？こいつは取りあえずは面倒事は消そつ

「こいつです」

そう言つて皐月を指さす。

「え？」

なんかこいつが言つてたがあつちがそれを遮つてこいつた

「なるほど、ならあなたは誰ですか？」

しるかよそんなこと

「しらねえよそんなもん。こじがどこかもわからねえのによ

「あれ？お前そんなに口悪かつたっけ？」

なんかこいつが言つてくる。だがそんなことは無視

「こじがどこだか知らないが俺は帰れるのか？」

「いえ、この魔法陣は呼ぶ専門です。」

「あ？魔法陣？てか帰れねえのかよ」

正直家に帰つてもやることなんてゲームとパソコンくらいだがな

「それで勇者様、王様にあつてくれませんか？」

「ああいいけど、俺だけ？」

「いえ、もう一人の方も来てください」

名前は言つてないがさすがに方はないだろ。まあいい

「まあいいが」

そう言つてあとは皐月に任せることにした。ああ言ひ忘れてたがいまいるところは15M位の部屋だなんか薄暗い

「ではついてきてください」

言われたのでついていくなんか皐月が全く分かつてないが引きずる。とこскаこんなに頭の回転遅い奴だつたか？こいつ。そう思つてみるとついたらしい

「では入つてください」

入つてみるとそこは金をふんだんに使つたような俺の嫌いな場所を

体現するよつだつた。

王の前に行くと王は意外とイケメンだったが残念ながらその長点を台無しにするかのように太っていた

「勇者よこの世界は魔王に襲われておる、助けてくれないか？」
目の前にいるのにガン無視される俺、正直帰つていいか？そう思いながら王と皐月の話を聞き流しているとなんか決まつたらしい聞いてみるとこんな感じだ。皐月は魔王を倒しに行く俺は強制的にお供Aポジションだ。田立ちたいわけじゃないがこれはひどくないか？それと今から訓練するらしい

訓練で何とかなる相手ならお前らで何とかしてほしいものだ

なんか呼ばれた（後書き）

——ここまで見ててくれてありがとうございます！
誤字脱字はバンバン言つてください
更新はできるだけ毎日やつていきます。
冬休みが終わつたら少なくなるかもしませんがね

訓練1（前書き）

— | 話題です

これは戦いの訓練です

これから訓練を開始するといわれたからしじうがなく訓練所間での道のりを歩いている俺はこれからで何をするのかを考えていた。取りあえず現実?のほうでは野球をしてたから少しは動けるがきつい運動とかはなればいいんだが普通こうのはほとんどきつこやつばかりと相場が決まっている。はあ

そういうえばこの世界は魔法があるらしい。と言ひても魔法陣がある時点で気づいてるかも知れないがな

だから魔法の練習ならいいなと思つていて。なぜなら動かなそりだからだ。

そう思つていてる訓練所についた。さあ行こうかと思つた瞬間裏から声が聞こえた

「お、空!もう来てたのか、訓練が楽しみなのか?俺は楽しみで夜寝れなかつたぜ!」

「それはお前だけだアホが。俺はぐつすり寝れたはボケ。てか訓練が楽しみとかそんなに戦いたいか?」

「当然だ!早くこの世界を救つてやらないと」

「ふーんどうでもいいけど……早く行くぞ?怒られたくないからな面倒だから」

そう言つて俺は歩き出した。と言つてもドアを開けたらあるんだがな。それで、ついて話を聞く

「今日の訓練はお前らの武器を選ぶところから始めるぞ」

そう言つて俺は何にしようか迷つてると武器庫に連れてかれらしい。いいのがあればいいが。

結構種類はあつたが俺は一つの物しか見ていない。なんであるのかは知らないが釘バットだ。

一応何故あるのか聞いてみたが昔からあるとしか言わなかつた。

昔はどんな国だったんだここは釘バットが10本あつたぞ。それで、

皐月は普通に剣を選んだらしい。それでまた訓練所に戻り訓練が始めた

と言つても実践訓練ではなく選んだ武器がどのような物か見るための時間らしい。

なのでいろいろ確かめてみたがこの釘バットはすぐ高性能だつた。なんせ剣とぶつけてみて剣が折れたのだ。ぶつけたというか切りつけもらつたんだがな。

で、釘が50本刺さつてたこのバットだが重さはそこまで変わらないしブンブン振り回してたら時間だといわれた。ここでいきなり実践らしい相手は皐月だ。

「なんでお前なんだよ。はあ、こりや負けるかな」

「なんでだ？お前も結構いけるだろ」

「何でもできるお前と平凡な俺とは差があるのさ。じゃ始めるか」

そう言つて審判の代わりの兵に田を向けると意味が分かつたのか

「開始！」

と言つてくれた。聞こえた瞬間俺は右に跳んだ。俺がいたところには剣を振り切つてる皐月がいた。

早すぎるだろ！と思つたがすぐに釘バットを前に出した。

ぎりぎり剣をはじけたがめっちゃ手がしごれる取りあえずけりを放つ俺。

だが避けられた。体制の崩れてる俺じゃ避けれない。と、皆が思つたが俺は片足で左に跳んだ。
ぎりぎり避けられたがここで俺は倒れた。立とうとしたところで剣を当てられ俺の負け。

「やっぱ無理か。まあわかつてたしな」

「とゆーかなんで俺の一回目を避けたんだ？結構本気で走つたんだが」

実は最初俺と皐月の間には10M差があつた。

「お前が足早いのは知ってるんだよ。陸上部のエース君」

「その言い方はやめてくれないか？」

「やだね、これがなくなると読者が俺が誰だかわからなくなるかも知らんだろ？」

「読者?」

「で、訓練はこれで終わり?」

そう聞いたら今の三セットやった後で魔法の訓練をするらしい。
もづわかると思つが4戦4敗だ。これは才能かなんかじやない気がするなあ。

訓練1（後書き）

面白かったでしょうか？

今きずいたんですがこの性格だとみる人限られそうですね
誤字脱字がありましたらコメントでお願いします

訓練2（前書き）

二話目です
今日は魔法の練習です

次は魔法の訓練をするらしいが、その前にどんな魔法があるかの勉強かららしい。

取りあえずこれは聞いたほうが良いだろう。なんせ身体能力は軽く野球してたから一般の人よりは少しあるかな？くらいだ。これで使えないとか言われたら終わる。で、話はその話は 実はもう終わっている。

考えてたら終わつたそつだ。 しようがないからもう一回お願いした。こんな感じらしい。

「魔法の属性から始めます。今度はちゃんと聞いてくださいね？」
まず、魔法は火、水、風、土があります。また闇や光もあります。
が、レアなので置いておきます。そして、魔法には攻撃系統のほかに補助系統などたくさんあります。魔法陣などは上級です。使えるのは人によって違うので後で一度やってみます。これくらいわかれば初級は大丈夫です。もつと詳しいことは毎回少しづつ教えていきます。で、何の系統が貴方たちにあつてているのか調べようとしたときあなたの聞いてませんでもう一回です。ほんとはもう何属性があつているかわかっているような時間なのですが、どこかの誰かのせいで・・・まあいいです

今から始めるので、この水晶に手を当ててください」

そういうて、リサさん（聞いたら教えてくれた）は水晶を取り出した。明らかに袋のほうが小さいのだが何があるのだろうか。終わつたら聞いてみよう。

まず、皐月が手を当てた。その瞬間水晶が白く発光した。まぶしさで目が痛い。後で殴るつ。

「まさか！これは光！？でも…いや勇者様なら…」
わかつっていたがやっぱり光らしい。まあこいつならこれだろう。俺はなんだろうな。目立たず役に立ちそうな風が良いが、まあいいさ

つせとやるかなどうせ俺はレアなんて出ないだらう。
そつ思つていた時期が俺にもありました。伏線張つたから闇でねえ
かな。

そして手を当ててみるとなんと！

なんて無く、まったく光らない・・・才能ないのか？

聞いてみると風らしい。しかし、普通は薄い青に光るらしい。どう
いう意味か考えて思つたことは一つ

一つは風の才がある以上にある。もう一つは逆に無いだ。まあ取りあえ
ず弱くてもほしいのが出たんだ。うれしい限りだ。やう思つてている
トリサさんが嘲笑ついていた。

聞くと、風はこの世界では一番弱いとなつてゐるらしい。風のステ
イグマを読ませてあげたい。

え？ なにそれだつて？ わからぬならググつてくれ。

それで、どれくらい才能があるか聞くと、ここまで才能があるのは
初めてだが、風じゃあねえと言われた

取りあえず、今日はどんなことができるかやる予定だつたらしいが
風属性になつた人は今まで、なんでだ！ と言つて鍛えなかつたらし
く、光は本であるくらいで城にはいなうそうだ。

結論は、発動方法は教えるので頑張つてください。とのことだ、や
り方はどこにでもいるらしい精霊にお願いをするだけらしい。皐月
がやつてみたら白い剣ができた。びっくりしてすぐ消してたがな。
俺はまず城がどうなつてゐるかどんな場所か教える、と思つた瞬間に
きなり知らない景色がいっぱい出てきた。石と鉄でできているので
城と言うことが分かつた。んー索敵とかに使えるな。そう思つてた
らびっくりするものが見えた。王と大臣が話してるだけならよかつ
たが、メイドっぽい人が倒れているのだ。

声も聞こえろよーと思つた時、いきなり皐月に話しかけられやめて
しまつた。

不機嫌になつてゐると、皐月がいきなり

「風じや何もできないのか？ だつたら釘バットに風をまとわせれば

？」と言つてきやがつた。

そんなことより、あの状況で消したせいで何か重要なことを見れたかもしないのに…とおもつていた俺は、流しておわらせた。

次に風の刃を作つて放てるかの実験は上手く行つたがいきなり端つこの方の壁が切れたので臘月はびっくりしている。リサ？さつき部屋を出てつたが？

最後に飛べるかのか？と気配を薄くできるか？の一いつをやつた。
飛びほうはできただが、気配の方はほんとんどできず、お前なんか変わつたか？くらいだった。

訓練2（後書き）

全部1400前後くらい書いてるんだけども、と書いた方がいいかな？

取りあえず誤字脱字はコメでお願いします

飯キター（前書き）

四話目です。

次あたりにステータスとか書こうと思つてゐるよ

飯キター

訓練が終わり飯の時間らしい。実はこの世界の「」飯はまだ食べていない。

普通は訓練は次の日じゃないか?と思ったがその時は魔法に興味が行つてたから言うのを忘れていたんだえ?訓練の時後に暁月が来てた?そりやあいつは動きにぐい服装だつたからな。

実はアイツの家って金持ちなんだ。めっちゃ動きを制限されてたよ?まあそんなことはいいんだ。話を戻すんだが実際ならつてみて結構使えるのでよかつた。

それで飯を食べるために食堂に移動しているんだが、遠い。なんか食べてるときくらい静かにしていたいのに、訓練所が近くにあつたらダメだ!

と、四代くらい前の勇者が言つたらしい。マジでふざけるな。そう思つてもここにできてしまつているのでもう変える事は出来ない。

もう訓練所を出て10分は歩いたね。まあ食堂と部屋が近いのだけは救いだ。

どっちにしろ起きてから訓練所までが遠いことを意味するんだがな。と考えてたらついたようだ。取りあえず入つてみると想像してたものとは違かった。

普通城だつたら長い机に座つて食べるとかじゃないのか?なんで学校みたいなんだ。

食べればいいがな。で、ついたのは訓練が終わつてから15分くらいたつてからだ。

なのに、なぜ?今「」飯を作り始めるんだ。

ご飯を食べた時おいしかったからいいがな。

どんなのが出たか?そうだな、かつ丼にうどんを足してそこから焼

いたような感じだ

想像できるか？できないだろ？」俺も見るまでないと思つてた。で、部屋に行つたんだがすぐ豪華だった。勇者に付き添つてるだけの俺でここまで豪華なんだ

皐月はどんなくらいかな？そう思つていたらノックされた。入つていと告げると入つてきたのは

皐月だつた。なんでお前なんだよ。そう思つたが一応

「どうした？」一人じや寂しくて死ぬと思つてきたか？」

と言つてやつた。

「いや、そんなんじゃないよ。暇だつたし一緒に簡単な魔法の練習でもしないか？とでも思つてね」

「じりねえよ。と言いたいところだがドアにメイドがいるからないよ」

「ホーケーを出す。

「まずは何をする？」

考へてから来いよお前はよおと思つたが

「一人がやれることを探してみるか、紙とペンはこつも持つてるからあるよ」

そうじつて出した。ああいつも持ち歩いてるのは嘘だ

実はわざと部屋の引き出しにあつたのをとつた。

「じゃあまず窓のからな。そうだなあ風で周りを探索とかよくない？」

「もうやつた」

「えつ、じゃあ風を自分に纏わせて防御とか」

「やつてみる」

そつ言つてやり始めた空。紙いらねえな

「できるな。ついでに飛ぶときは風を曰くまくして飛ぶか」

「え？ 空つて飛べたのか？」

「訓練の時風で飛んだろ？ 覚えてるよ」

「悪いな。あとはどうする？ 俺はもつともいつかによ？」

「俺もない。よつて次はお前のだ」

「んーじゃあ光で目くらましは?」

「それは光を出してるだけだボケ。せめて光で目をくらませて相手が目を閉じる前に残留でも目に入れろよオイ。そんくらしねえとすぐに相手は立ち直るはアホ。歴戦なら目を閉じて気配で苦留はバカ。やるならそんなことができる奴にも対抗できねえとダメだわクズ。わかつたら目くらましダメはやめろ」

と、言いたかつたんだがいいんじゃない?と肯定した。

「なんか裏でいろいろ考えてそうだけどこれは〇〇だな?じゃあ次はー」

ここまで行つたとき、いきなり窓が開いて

「空殿はどうやらだ? 貴殿の命もらいあげに来た!」

とか言つてゐる馬鹿が来た。まあ 皐月に任せりや何とかなるだろ

そう思つてたのに

「おい空どうする?」

と焦つた表情でぱりしゃがつた。せめてここにはいなによくらいと言えよ

そつ思つていたら、なんかナイフ投げてきた。はじいたけどな。皿で。なんであるか?持つてきたに決まつてんじやん。

飯キター（後書き）

誤字脱字はよろしく

コメ待ってます。

質問とかがコメで来たらあとがきでみるよ

ステータス（臨時更新）（前書き）

五話目！

ステータス（臨時更新）

主人公

陰咲空

性格：冷めてるが作者のせいで表せれてない。根は結構いいやつだがそこまでさらさない。

魔法属性：風 90% ? ? 10%

使用武器：釘バット（黒）

冬介皇月

性格：熱血漢 + 前向き + お人好し = のような感じ

魔法属性：光 100%

使用武器：剣

リサ

性格：この世界での普通の魔法使いをそのまま

魔法属性：水 100%

使用武器：杖 ナイフ

王

性格：結構いい人 空を無視してたのは勇者に一秒でも早く国を救つてほしいから

魔法属性：火 100%

使用武器：落ちた剣・真

何故か魔王

性格：まだ明かさないよ

魔法属性：闇 100%

使用武器・いわゆるだけ基本剣

ステータス（臨時更新）（後書き）

誤字脱字、いろいろのをのしたほうが・・・とかはコメでお願いします

道に圧された。あこつか（前書き）

ありあじて嘘はないー！

いや さて 鷺田の旅に圧されるよつがえてあつまえ。

追い出された。まあいいか

そして、一ヶ月がたつた。

早い？時間が飛んだ？俺が負けるのを延々と見たいなら番外で書こうか？

今は、勇者のお披露目会をやっている。俺は端で飯食つてるけどなで、食べていると会が終わりに近づいてきた。でなぜかここでお供を紹介するらしい。

普通最初だと思うんだが？なんてのは右の方に投げてくれ。

で、それがこれ。ああ王様が言つてるからね？

「これより、勇者のたびについていく仲間を発表する。一人目は、聖騎士コウロ＝リウだ！」

んでその「コウロって奴が歩いていく。ところで最初じゃないってことは俺つて最後？

「次に、大魔法使いユウ＝リナロバアだ！」

こいつは女だ。前あつたけどいやなやつだった。どんな奴か？後でわかるわ

「次、賢者ルウ＝リナロバアだ！」

さつきの奴の妹。こいつはまだあつたことない。てか5人パーティか？

「最後に、僧侶カイト＝クルイルだ！ 以上五人が勇者のパーティである。わかつたな？」

おい、俺は？と思つてたら皐月が

「おい、空は？」

と言つてくれた。嬉しいんだか悲しいんだか。

「空？ 誰だそれは。そんなやついないが？」

俺の存在オワタヽ(^ ^)ノ

畜生、なんでこうなつた。俺は？帰れないしやることもない。どうすりやいいんだ？

なんて思つてるとHが

「ところで、空という者はここにいるのか？ 関係者以外来てはいけないよ」としているのだが「

ここまでくると城から追い出されそうだな。あらすじが詐欺になりそつなんだが・・・

んー、いや行けるか？こんな感じにやれば行けるかもな。そう考えて、皇月に話しかけよとした瞬間

俺は、城を追い出された。意味わからない？勇者になれなれしく話しかけようとしたかららしい。

どうしてこうなった？まあいいや。どうせやりたいことは城に居てもやれないし。まあ都合よくあいつが来ればいいんだがな。さて、わかつてない人がいるなら下の行を見てくれればわかる。なんて思つてるうちに目的地に着いた。どこか？ギルドだよ。中はどつかのゲームみたいで掲示板みたいのがあり一階建て。受付のところに行くとそこには期待を裏切るよつこむやこのっさんがいた。

「ここで登録できません？」

一応手に出る。

「初めての方ですか？ 登録はあつちです」

畜生、まあいいや

「ありがとうございます」

そう言つて言われた方に行く。するとNにはなんとおばさんがいた。

「登録したいんですが」

「はい、できます。登録するんですね？」

「はい」

「じゃあ、このカードに血を垂らしてください」

と、カードを出された。そこに血を垂らす。ところでも

「ナイフ貸してくれません？」

「……はどうぞ」

少し間が開いたがナイフを貸してくれたそれで指を軽く切つて血を垂らす。

「これでいいですか？ あと貸してくれてありがとうございます」「はい、これあなたはギルドの一人です。 説明はりますか？」

「いや、いいです」

なんて断りたいが、少しだけには知識がない。

「お願いします」

これしかない。てか、ほぼ他の小説と同じだと思うんだが？ これは替えようがない

「まず、ギルドについてです。ギルドと言つのは依頼を受けて依頼をこなし報酬をもらう。簡単に言つと傭兵と考えてください。しかし、強くない者もたくさんいます。そんな人が強い敵と戦うようなことをしたら死んでしまうかもしません。なので、皆様にはランクが付きました。このランクはSが一番強くFが一番弱い、というか新入りをさします。それで、自分より一段上まではクエストを受けますがそれより上は無理。という風にしました。もちろんあなたはFです。何か質問は？」

ちょ、長いようでみじかつ取りあえず質問か。

「えつと、ランクを上げるには何をすれば？」

「それは、自分より上のクエストを一つこなすか自分のランクのクエストを10個こなすと昇格できます

でも、自分より低いクエストは受けても昇格はありません。他にありますか？」

特にならない。

「ありがとうございました。また、何かあつたときは質問しますんでお願いします」

「いや、ここ昇格に入るの限定です。受けでしてくだそー」

「ちよ、なんだつてー

追い出された。まあいか（後書き）

誤字脱字の報告待つてます
待つものじやないんですけどね。
まあ、作者の力量がね・・・

まじ、これでお供だ（前書き）

一応お供に入りました
まあ、喋っていないんですけど。

よし、これでお供だ

さて、前ギルドに入った空だ。

え？ 空じゃわからない？ なんてことはないよな？

で、ギルドでまず、クエストを受ける。何のクエストか？ 一個上の

クエストだ。

出来れば討伐系のがいいな。なんでか？ 実践の練習だ。

まあ、Eのランクにいいやつなんてないがな。

王道でゴブリン無いかななんて思つてるとびっくりなことがあった。

スライムがある。

え？ 普通？ いやいやクエストの方じゃないぞ？ ギルドに普通にいたんだ。

まあ、みんな攻撃しないから置いとくけどな。

受けたクエストは「ゴブリン狩り」のクエストだ。

ある程度倒してほしいらしい。

ゴブリンの姿はそうだな…… 醜い小人とも思つとけば10%くらいはあるてる。

移動方法？ 歩きだが？ てか今まで何もしゃべってないんだが見にくないか？ これ

つと、話がずれたな。それで、寒はもうつこてるんだが多いんだ。
敵が

一匹見たら30はいると思つて受付で言われたけどさすがに最初
つから何十匹いるし、全部で何匹いるんだ？ まあ頑張るしかないか。
なんて思つて釘バットをだした。そして振る。振る。振る。振る。
何回振つただろうか？ 手が痛くなつてきた。ああ4回じゃないから
な？

最初に出てきていた奴らを倒した。そして、次が来た。

今度は数匹だ。バンバン倒していく。少し時間がたつたからもうい
いな。

そう思つて帰^かりうとしたら、裏から攻撃しようとしたゴブリンと
目があつた。

少しの間沈黙して、ゴブリンは逃げて行った。

クエストおわりと。帰るかなあ

で、帰つた。ギルドに着くこ^ろには日付が変わつちまつた。
どんくらい遠いか？ 10km位さ。そんくらいならすぐ着く？ なら
バットを500回振つて20km往復してみろ。めっちゃ疲れるか
ら。もともとそこまで体力ないほうだから俺は。

かえつてクエストをクリアした。報酬の50銀貨をもらい、昇格す
る。

これで晴れて俺はEランクだ。え？ まだそんなん？ とかは言わない
でくれ。

ああ、お金の単位は札>白金貨>金貨>銀貨>銅貨の順だ。それで、
銅貨が100枚で銀貨と交換、銀貨100枚で金貨だ。そんで、金
貨100枚で白金貨、白金貨100枚で札と交換できる。
札がどんなのか？ そうだな、普通にお札だね。1000円札とかそ
んなんとほぼ同じ。

今俺は50銀貨を持つていて、宿代は10銀貨だ。一番この町で安
い宿でな。

普通の人の年間の収入は1金貨～10金貨くらいだな。

差？ 仕事が違うからな。

取りあえず、皐月に付いてかんとタイトルがな…まあ、もつチヨイ
で訓練も終わりだつたはずだ。

大体明後日くらいに終わりつて言つてたからその時ついてこ^ろ。そ
れまでにランクを上げてやんよ。

なんて考えていた時期がありました。次の日アイツが旅に出た。

まあついていけたけどな。最初からいたお供にいろいろ言われたよ。

今のランクはB。持ち金は3金貨だ。布製でいい防具買つたらほ
なくなつた。

武器はまだ釘バットだ。これ結構使える。

よし、これでお供だ（後書き）

サブタイトルが詐欺になってしましました
まあ、次で頑張るか・・・

アガハシの話・1(前編)

予告通り鼎田サイドです

ドスッ

嫌な音と腹に痛みを感じた。それで俺は起きた。
痛みは空が蹴つたらしい。

「おい鼎丸起きたか?」

起きたけどさすがに蹴らないでほしい

「ああ起きたが蹴つて起こすなつて前から言つたじゃないか」

「そんなこと言つてたか?まあいいこれはなんだ?」

「これ?つてなんだ?」「ー?」

周りを見てから氣づいたが自分の部屋とはかけ離れていた
なんだここは?と考えていた時、一人の人が話しかけてきた

「あの、どうちが勇者様ですか?」

「どうちが勇者だ?勇者?」

「いこつです。」

考えてたら俺が勇者とこいつと云なつていった。

「え?」

「なるほど、ならあなたは誰ですか？」

「しらねえよそんなもん。ここがどこかもわからねえのこよ
つてこいつここまで口悪かつたか？」

「あれ？お前そんなに口悪かつたか？」

「ijoがここがどこだか知らないが俺は帰れるのか？」
無視するなよ

「いえ、この魔方陣は呼ぶ専門です」

「あ？魔法陣？てか帰れねえのかよ」

一気に話が進んでいく。というか帰れないのか？

「それで勇者様、王様とあつてくれませんか？」

まあ会うだけならいいけど

「ああいいけど、俺だけ？」

「いえ、もう一人の方も来てください」

「まあいいが」

「こいつ顔が歪んでるぞ。方って呼ばれたからか？
まあいいか。

そして、王様のいるところに着いた。

「勇者よこの世界は魔王に襲われてある、助けてくれないか？」

ものす「ぐく、王道だな。でも、助けてと言われたら助けないと。
「はい、わかりました。ところで、こいつはどうなるんですか？」
「つむ、この城でお主を待つてもらおう」

それは困る。こいつにはお世話をなっているからな。待たせるなんて

「いえ、空も一緒に旅に連れて行かせてください」

「ふむ、しょうがないな。ならばその者にも訓練を受けてもらわないとだな」

「はい」

そして、話が終わった

しかし、空は話を聞いてなかつたらしい。俺は一から教えてあげた
がそれもある程度だけ聞いたらしい

最後に簡単にして納得していた。まあ空がわかるならいいか。

せつとの話・1（後書き）

長すぎるから少しきりで切ってみた
空じゃないと性格がやりにくい。これ
まあしようがないですよね
あと、冬休みが終わっちゃったから毎日更新は無理かもしません。
見てくれる人がいるか知らないんですけど…
PVがそうだな10000に行くなんてないだろ？けど
もしもあつたらなんか書きますかね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0743ba/>

陰咲君はお供

2012年1月10日21時45分発行